OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	偽り隠す者、サッルスティウス ： 『カティリーナの陰謀』の執筆理由
Author(s)	鷲田, 睦朗
Citation	パブリック・ヒストリー. 2006, 3, p. 77-87
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66437
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

Journal of History for the Public, Vol. 3, 2006, pp. 77-87
Research Note : Simulator ac Dissimulator
Sallustius' Motive of Writing "de coniuratione Catilinae"
Mutsuro WASHIDA

研究ノート

偽り隠す者、サッルスティウス

――『カティリーナの陰謀』の執筆理由――

鷲田睦朗

はじめに

ルネッサンス期以降のヨーロッパで最も好まれたローマ人歴史家は誰であったか。その栄誉を得たのは、カエサルでもリウィウスでもタキトゥスでもなく、サッルスティウスであったといわれる[(1)]。その理由は恐らく、一般にいわれるように、簡素ながら躍動感のある彼の筆致と、それにより高められた倫理的な調子と、読者の目を引く「ローマ共和政の没落」というテーマとによるものであろう。彼の歴史著作は、単独の事件を扱った 2 点のモノグラフ『カティリーナの陰謀』(以下、『陰謀』と略す)[(2)]『ユグルタ戦記』と、未完に終わった年代記『歴史』の断片とが残存している。その他、彼の手によるものと称される演説や書簡も存在するが、これらは後世の別人による作文とみなされている。

ガイウス＝サッルスティウス＝クリスプスには、これまで様々な評価が下されてきた。後 1 世紀の修辞学者クィンティリアヌスは、歴史叙述においてもローマがギリシアに劣らないことを示す文脈で、「サッルスティウスをトゥキュディデスに対置するのを躊躇わないように」と

(1) 松本仁助、岡道男、中務哲郎編『ラテン文学を学ぶ人のために』世界思想社、1992 年、69 頁、島田誠「サルスティウス」『歴史学事典　5 歴史家とその作品』弘文堂、1997 年、240-241 頁の 240 頁。

(2) この著作については複数の写本で異なる題名が伝えられているが、一般的には『カティリーナ戦記』(Bellum Catilinae、Bellum Catilinarium) と称される。古代人は単に『カティリーナ』(Catilina) と呼ぶ場合が多いが、これが正式な題名であるかは分からない。本稿では Salluste, *Catilina, Jugurtha, Fragments des histoires*, texte établi et traduit par A. Ernout, Paris, Collection des universités de France publiée sous le patronage de l'Association Guillaume Budé, 10eme tirage, 1974(Budé 版), p. 54, n. 1 に倣い、作中の表現「カティリーナの陰謀」(de coniuratione Catilinae) を題名として採用する。cf., Sall., *Cat*., 4. 3.

高く評価する[3]。他方、彼の古風な文体を古人の剽窃とする非難が、スエトニウスによって伝えられている[4]。時系列面での不正確さをはじめとする諸々の限界はあるものの、概ね信憑性は高いとする見解が近年では一般的であるが[5]、『陰謀』などはカエサルが事件に関与したことを隠蔽する目的で書かれた政治的パンフレットの類に過ぎないとする見解も存在した[6]。

しかしながら、いずれの見解においても、サッルスティウスが自らの望むようには著述できていないかもしれないという可能性は看過されがちである。彼に自由な著述を許さなかった外的要因として想定されるのは、以下の二点である。まず、「カティリーナの陰謀」事件解決の功労者であるキケロ自身の『カティリーナ弾劾』演説による影響である。この影響で『陰謀』が執筆される前 42 年頃以前に、事件の評価は既に定まっていた。たかだか 20 年余り前の前 63 年に起こった事件を扱っているのだから、大幅な事実改変は確かに不可能である。ただし、その「事実」自体が当事者によって創られたものなのである。例えば、キケロによって決定付けられた陰謀者たちのイメージは、サッルスティウスの描写に踏襲されている[7]。ただ、この点についてヴィルキンスが異論を唱えている。彼女によれば、サッルスティウスはカティリーナを英雄的要素と悪漢的要素を兼ね備えた人物として描いており、これはキケロによるカティリーナ像とは異なる性格のものであるとのことである[8]。この互いに矛盾した結論は、キケロに由来する公式的な「事実」と著者自身の価値観とが、『陰謀』で齟齬を来しているために導き出されたものである。この点をどのように理解するかが本稿の焦点となる。もう一つ看過してはならないのは、前 43 年にキケロが舌禍に遭ったことからも明らかなように、共和政期には曲がりなりにも存在していた言論の自由が、当時のローマでは実質的には失われてしまっていたことである。単なる文筆家ではなく、護民官、プラエトル、属州総督といった政治経歴を持つ著者が、これらの外的要因を度外視して無邪気に執筆したとは考えられないのである。

このような歴史叙述には向かない状況にあって、サッルスティウスが処女作で敢えて直近の時代を扱った理由は何であろうか。一つの答えは、彼が範としたとされるトゥキュディデスに倣って、同時代史を記したのだというものである。しかし、そのような高邁な動機、あるいは功名心だけで、彼が内乱の時代に歴史を著すという危険を敢えて冒したとは考え難い。事実、

(3) Quint., *Inst*., 10. 1. 101. 後 1 世紀末に活躍したマルティアリスも、「サッルスティウス」という題名の寸鉄詩で「学識者たちが異口同音に斯くの如く述べる。ローマの歴史においてはクリスプスこそが第一なり、と」と詠っている。Mart., 14. 191.

(4) Suet., *Gram*., 10; 15.

(5) E.g., R. Syme, *Sallust*, Berkeley, University of California Press, 1964, p. 136.

(6) サッルスティウスに関する研究史については、C. Becker, Sallust, in: *Aufstieg und Niedergang der Römischen Welt*, I 3, Berlin, Walter de Gruyter, 1973, S. 720-754 の S. 720-731 が参考になる。その他、Budé 版、Sallust, translated by J. C. Rolfe, Cambridge, Loeb Classical Library, reprinted 2000(revised 1931)(Loeb 版)、Gaio Crispo Sallustio, *La Congiura di Catilina*, prefazione, traduzione e note a cura di L. S. Mazzolani, Milano, Biblioteca Universale Rizzoli, sedicesima edizione 2000(prima edizione 1976)、Sallustio, *La Congiura di Catilina*, a cura di G. Pontiggia, Cles(TN), Oscar Classici Greci e Latini, Mondadori Printing S.p.A., 1992 などの対訳テクストに付せられた註釈も参照した。

(7) Cf. Syme, *op. cit.*, p. 136.

(8) この点については、A. T. Wilkins, *Villain or Hero, Sallust's Portrayal of Catiline*, New York, Peter Lang, 1994, pp. 29-70 で論じられている。この著作に対し、R. J. Hoffman, Sallust and Catiline, *The Classical Review* 48-1, 1998, pp. 50-52 は、一種の視野狭窄であると一蹴している。

第二作『ユグルタ戦記』で前 2 世紀後半の出来事が扱われることを考えるならば、この答えに説得力が伴わないことは明らかである。とするならば、事件そのものに、サッルスティウスを執筆に駆り立てる何かがあったと考えるべきであろう。彼自身は、「犯罪と危険の新奇性の点で、特に記憶すべきである」から、この事件を取り上げたと述べている[(9)]。しかしながら、それだけが真の執筆理由であるとは考え難い描写が『陰謀』には散見される。以上の観点に基づいて、著者が明記することのなかった『陰謀』の執筆意図を考察することが、本稿の課題である。「作家の本質は、その処女作に最も色濃く表れる」という人口に膾炙した言葉が、彼にも該当するならば、この考察を通じて、歴史家サッルスティウスの本質に迫ることができよう。

最後に本稿の構成を述べる。まず第 1 章で事件の説明を行った後、第 2 章で外的要因の『陰謀』への影響を考察する。それを踏まえて、第 3 章で著者のカティリーナ像を検討する。

1　カティリーナと「カティリーナの陰謀」

本章では、サッルスティウスが扱った「カティリーナの陰謀」事件の事実説明を行う。この事件は、ルキウス＝セルギウス＝カティリーナを中心としたグループが前 63- 前 62 年に引き起こしたクーデタ未遂である[(10)]。カティリーナは、前 108 年頃、名門ではあるが政治的にも経済的にも不遇なパトリキ貴族家系に生まれ、ポンペイウス＝ストラボの麾下で同盟市戦争 (前 91- 前 88 年) を戦った。前 80 年代末の内戦では、スッラ派の一員として有産者の財産没収に荷担して蓄財したようである。前 68 年にはプラエトル職に就任し、翌年から 2 年間、属州アフリカ総督を勤めた。ローマに帰還する直前に、任地で非合法的に獲得した財産を返還するよう訴追された結果[(11)]、前 65 年度と前 64 年度のコンスル選挙から排除された。この頃、彼が多数の元老院議員の殺害計画 (所謂「第一次カティリーナ陰謀」) に関与したとの伝承があるが、彼が積極的に関与した蓋然性は低い[(12)]。前 64 年に無罪を宣告され、晴れて前 63 年度コンスル選挙を戦ったが、キケロとガイウス＝アントニウスに敗れ、翌年の夏にも再度落選した。

いつ頃からカティリーナが陰謀を計画したのか。この点は陰謀の性格を理解する上で重要であるが、正確なところは分からない。恐らく選挙を戦うために組織された集団が落選後に暴力的手段に訴えてでも、彼をコンスルにしようとしたと考えるのが妥当な理解であろうが、史料

(9)　Sall., *Cat*. 4. 4.

(10)　この事件を革命とする見解があるが、カティリーナの目的が、国家体制を変革することではなく、コンスル職などの体制内における主要ポストを非合法手段に訴えてでも獲得することであった点を踏まえるならば、そのように評価することはできない。なお以下の説明に際しては、註（6）の文献の他、M. Gelzer, s.v. Sergius 23, *Paulys Realencyclopädie der Classischen Altertumswissenschaft*, Band IIA 2, Stuttgart, J.B. Metzlersche verlagsbuchhandlung, 1923, Spp. 1693-1711、T. R. S. Broughton, *The Magistrates of the Roman Republic*, vol. 2, New York, American Philological Association, 1952、E. Badian, s.v. Sergius Catilina, Lucius, *Oxford Classical Dictionary*, 3rd ed., Oxford University Press, 1996, p. 1393、J. von Ungern-Sternberg, s.v. Catilina, *Der Neue Pauly*, *Encyclopädie der Antike*, Band 2, Stuttgart, Verlag J.B. Metzler, 1997, Spp. 1029-1031 も参照した。

(11)　Asc., *Corn*., 58.

(12)　この陰謀は、日時、中心人物、目的などの点で諸史料の伝承が矛盾している。cf., Cic., *Cat*., I. 15; *Mur*., 81; *Sull*., 11; 81; Sall., *Cat*., 18-19; Liv., *Per*., 101; Asc., *tog. cand*., 74; 82-83; Suet., *Iul*., 9; Cass. Dio, 36. 44. 3-5. cf. R. Seager, The First Catilinarian Conspiracy, *Historia* 13, 1964, pp. 338-347.

的根拠は存在しない。具体的には、コンスルをはじめとする多くの元老院議員たちを殺害し、首都ローマに放火し、イタリア各地で武装蜂起を起こし、混乱に乗じて現政権を打倒する計画であったとされる。この陰謀には、スッラ派退役兵などの貧困層だけでなく、11 人の元老院議員を筆頭に、騎士、イタリアの地方有力者なども参加していた。クラッススやカエサルといった有力政治家たちの関与を示す史料もあるが[13]、真偽の程は定かではない。参加者の動機も多様で、政権に参画しようという者がいた一方、混乱に乗じた略奪を期待した者、カティリーナの「借金の帳消し」政策に惹かれた者もいたとされる。

この計画はキケロの察知するところとなり、10 月 21 日に元老院で告発された。ガイウス＝マンリウスによるエトルリアでの徴兵も伝えられたため、「コンスルたちは国家が損害を蒙らぬように尽力せよ」と元老院最終決議がなされ、27 日にマンリウス軍の蜂起が伝えられると、各地への軍隊派遣、警戒の徹底、密告の奨励などの対策がなされた。11 月 6 日晩にマルクス＝ポルキウス＝ラエカ邸の秘密集会で翌朝のキケロ暗殺が計画されたが、キケロは難を逃れ、8 日に元老院でカティリーナを糾弾した（『カティリーナ弾劾第 1 演説』）。彼の逐電を承けて、翌 9 日にキケロはフォルムで民衆に事態を説明した（『第 2 演説』）。カティリーナのエトルリア行が伝えられると、元老院は彼を公敵と認定し、ガイウス＝アントニウスに追討を命じた。

カティリーナの仲間はローマに残っていたが、当初、誰が共謀者であるかは不明であった。この頃、属州総督による処罰を不当として訴えるためにローマを訪れていたガッリア人の一部族アッロブロゲス人の使節団に、共謀者の中心人物プブリウス＝コルネリウス＝レントゥルス＝スラが、軍事援助を得ようと接触した。使節団はローマとのパイプ役であったクィントゥス＝ファビウス＝サンガに相談し、サンガはキケロに通報した。一網打尽を狙うキケロは、彼らをスパイに仕立て上げて、陰謀に加担している者を知るために、故郷の同族を説得するために必要であるからとの名目で、署名入りの誓書を求めさせた。使節団は誓書を獲得し、カティリーナに会うために 12 月 2 日の夜半にエトルリアへ出立することになった。レントゥルスは、案内人ティトゥス＝ウォルトゥルキウスにカティリーナ宛の密書を託した。3 日未明、キケロの命令で 2 人のプラエトルたちがムルウィウス橋で彼らを待ち伏せて捕捉し、陰謀の証拠となる諸書状を発見した。証拠を得たキケロは即時にレントゥルスら 5 人を逮捕し、元老院で尋問した。彼らは陰謀への関与を認め、元老院は有力者の私邸への一時勾留を決議した（この際の民衆に対する事情説明が『第 3 演説』）。彼らを奪還する動きがあったため、キケロは 5 日に 5 人の処分を元老院に諮った。議論の結果（この時のキケロの演説が『第 4 演説』）、死刑が決議され即日執行された。彼らの処刑を伝え聞いたカティリーナは残兵を率いてガッリアへの逃亡を試みたが、ピストリア近郊で進路を絶たれたので、南に引き返してガイウス＝アントニウス軍と対峙した。翌前 62 年 1 月上旬に争われた戦闘で、カティリーナは壮烈な戦死を遂げたと伝えられている。事件の顛末については以上に止め、次章より考察に移ることとしたい。

(13)　クラッススの関与の可能性に触れているのは、Sall., *Cat*., 17. 7; 48. 4-9; Plut., *Crass*., 13。カエサルについては、Suet., *Iul*., 17; Plut., *Caes*., 7; *Cic*., 20; 30。

2　外的要因による影響

本章では、サッルスティウスが『陰謀』を執筆する際に考慮しなければならなかった外的要因が、どのように著作中に反映されているかを確認する。冒頭で述べたように、著者が望んでいたかどうかは別としても、『陰謀』には外的要因の影響が明らかに窺われる。それは、①執筆時の政治状況と②キケロ『カティリーナ弾劾』の影響である。

①については、前 44 年 3 月 15 日にカエサルが暗殺されて以来、政治状況は混迷を極めていた。カエサルを暗殺したマルクス＝ユニウス＝ブルトゥスら共和派は東方を掌握し、イタリアでは、マルクス＝アントニウス、レピドゥス、オクタウィアヌスの三者が国家再建三人委員となっていた。この両陣営の対立が『陰謀』に反映されているのである。

『陰謀』のクライマックスは、前 63 年 12 月 5 日に行われた共謀者の処分をめぐるカエサルと小カトーの演説である[14]。カエサルは拙速な処刑は悪しき前例になるかもしれないから当面は見送るべきと述べ、小カトーは今は国家の存亡がかかった緊急時であると即時の処刑を強硬に主張した。この両者の演説が著作全体の約 6 分の 1 の分量を占めているので、『陰謀』における主要トピックとみなされているが、不自然なまでの大きな扱いが、この著作のバランスを崩していることも事実である。この箇所の後に、退廃した国家で卓越した徳を持っていた両者の本性と性格とを解明すると述べられ[15]、次のように比較される。

> さて彼らは、出自、年齢、弁舌が、ほぼ同等であった。精神の偉大さは等しく、また栄光も (同程度) であったが、各人各様 (の栄光) であった。カエサルは善行と気前の良さによって偉大であるとみなされ、カトーは生活の高潔さによって (偉大であるとみなされていた)。前者は温情と同情において優れているとされ、後者には厳格さが威厳を加えていた。カエサルは与え、援助し、許すことで、カトーは全く贈与しないことで、栄光を手に入れた。一方には不運な者たちにとっての避難所が、他方には悪人どもにとっての破滅があった。前者の懇意、後者の一徹が、賞賛されていた。つまり、カエサルは、働いて、眠らないでいようと心に決めていた。友人たちの仕事に専念して、自らの (仕事) を顧みず、贈物に相応しいものを決して拒否しなかった。自らには、(権限の) 大きな命令権と軍隊と、武徳が輝けるようになる新規の戦争とを望んでいた。他方、カトーは、節制と品格と、やはり、とりわけ厳格さとに熱意があった。資産家と資産を、権謀家と権謀を競うのではなく、精力家と活力を、節制家と貞潔を、廉潔家と禁欲を競っていた。優れた人と思われるより、(優れた人で) ありたいと望んでいた。このように栄光を求めなかったので、却ってますます (栄光が) 彼に伴っていた[16]。

当時、カエサルは翌年度のプラエトル職就任予定者、小カトーは護民官職就任予定者にすぎ

(14)　Sall., *Cat*., 51-52.
(15)　Sall., *Cat*., 53. 5-6.
(16)　Sall., *Cat*., 54.

ず、著者の評価はいささか過大である。ここで恩義のあるカエサルだけを持ち上げているならば話は簡単で、彼の党派性が指摘されるべきであろうが、カエサルに最期まで抵抗した小カトーをも称揚していることから、その指摘は当たらない。むしろ、小カトーを理想とする共和派とカエサルの遺産を継ぐ三頭派、双方に配慮した著述であろう。この点で比較対象として興味深いのは、前 41- 前 40 年頃に執筆された『ユグルタ戦記』でのマリウスの描写である[17]。この著作の執筆される前にブルトゥスら共和派がフィリッピの戦いで壊滅したことが、この描写に影響している。その結果、『ユグルタ戦記』ではカエサルの大伯父マリウスだけが高く評され、『陰謀』の小カトーに相当するべきメテッルスは、いうならばマリウスの引き立て役でしかない。同様に『陰謀』で取り上げられる人物としてはセルウィリアが挙げられるが[18]、著者が彼女のことを唐突に詳述しているのは、彼女の息子が、共和派の前 43 年度ガッリア＝キサルピナ属州総督デキムス＝ユニウス＝ブルトゥス＝アルビヌスであったからかもしれない。

このように考えると、事件解決の最大の功労者キケロが『陰謀』で大きく扱われていないことにも得心がいく。先述したように、キケロが殺されたのは三頭派のマルクス＝アントニウスを『フィリッピカ』で痛罵したからである。そのキケロを賞揚するのは、あまりに無謀な行為であろう。また②の観点からも、キケロ自身の手による『カティリーナ弾劾』が流布していたために、改めて彼の功績を取り上げなかったとも想定される。

②が顕著に表れるのは、主人公カティリーナの描写においてである。キケロはカティリーナを口を極めて攻撃しているが[19]、これはサッルスティウスにも次のように踏襲されている。

> ルキウス＝カティリーナは名門の出自で、精神面でも身体面でも大きな力を持っていたが、性根は邪悪で歪んでいた。この男は、若年期から、内戦、殺人、略奪、市民の不和を好んでいて、それらの中で自らの青年期を過ごした。身体は、他人には信じられない程、飢えや寒さや不眠に耐えた。精神は、大胆で狡猾で捕らえ所が無く、いかなることをも偽り隠すことができ、他人の物を欲しがり、自分の物を浪費し、様々な欲望に燃えていた。弁舌には長けていたが、分別はあまりなかった。(中略) ルキウス＝スッラによる支配以来、国家を獲得しようという最大の欲望が彼に入り込んだ。(中略) 先に述べた彼の行状によって悪化していた家産の貧困と罪の意識との両方によって荒んだ精神は、日毎に、ますます苛立たせられていた。さらに、この精神を、最悪で、かつ相互に矛盾した悪徳である贅沢と貪欲とに苛まれていた市民たちの堕落した風紀が駆り立てていた[20]。

このように描写されるカティリーナが清廉潔白でなかったことは確実ではあるが、ヴィルキンスが言うように、ここまで極端な人物であったとも考え難い。なぜなら元老院議員として不適格な人物は、ケンソルにより除名されていたからである。実際、前 70 年度のケンソルは 64

(17) E.g., Sall., *Iug*., 63. 2-6.

(18) Sall., *Cat*., 25.

(19) E.g., Cic., *Cat*., I. 13-14.

(20) Sall., *Cat*., 5. また Sall., *Cat*., 15 では、彼の不適切な女性関係が述べられ、アウレリア＝オレスティッラと結婚するために実の息子を殺害したために、狂気を宿したとされる。

人の元老院議員を元老院から除名しており、レントゥルスやガイウス＝アントニウスは除名されているが、カティリーナは除名されていない[21]。古代のレトリックでは、事実よりも真実らしいことの方が採用されがちであるから、クーデタ事件を引き起こした人物の実像よりも、引き起こした事件に相応しいイメージが語られるのは、当時の歴史叙述では一般的である。ましてやキケロがネガティヴなイメージを散々なまでに喧伝しているのだから、公式的な「事実」に基づいてカティリーナを描写する材料には、著者は事欠かなかったと言えよう。『陰謀』における外的要因の影響は、以上のようなものであった。しかしながら、先にも述べたように、このような「事実」とは、いささか相容れない著者自身の価値観に基づく描写が存在するのである。それは、主人公カティリーナをめぐるものである。

3 『カティリーナの陰謀』におけるカティリーナ像

本章では、まずカティリーナの言動についての描写の一部が、前章で示された怪物的な悪漢としてのカティリーナ像とは相容れない性格を持っていることを確認する。その上で、このような齟齬をどのように理解するべきかという問題を考察する。

『陰謀』においてカティリーナに仮託されている言説は、演説が 2 点、書簡が 1 点ある[22]。いずれもサッルスティウスが理想として示す、倫理的なものである。ここでは少々長くなるが一例として、最後の戦いに挑む前に自軍の前で行ったとされる演説を取り上げたい。

> 戦士諸君よ、言葉が勇敢さを (人に) 付け加えないこと、将軍の演説によって、怠惰 (な軍隊) が活発には、臆病 (な軍隊) が屈強にはならないことを、私は承知している。各人の精神に本性や性格による大胆さがどれ程あるかは、戦時に明らかになるのが常である。栄光や危険が駆り立てていない人を鼓舞しても無駄である。内心の恐怖が両耳を閉ざすのである。しかし、少し助言し、また私の計画の理由を明らかにするために、私は諸君を召集した。戦士諸君よ、レントゥルスの無気力と不熱心とが、彼自身と我々にどれだけ大きな損害をもたらしたか。またそれだけでなく、首都から援軍を待つ間にガッリアへ私が出発できなくなったことは、むろん諸君も知っていよう。実際今や、我々の状況がどのような立場にあるかは、私同様に諸君全員が理解している。敵の軍隊は 2 つである。一方は首都から、もう一方はガッリアから (の道を) 阻んでいる。たとえ (我々の) 意志が (この地域に留まるように) 強く勧めたとしても、穀物や他の物資の欠乏が、この地域にこれ以上長く留まることを妨げる。どこに行くと決めるにせよ、道は鉄 (剣) で切り開かれねばならない。それゆえ諸君が勇敢で覚悟ができているようにするため、また、戦闘に入った時、諸君は、富や品格や栄誉、さらには自由と祖国も、諸君の (剣を持つ) 右手でもたらすの

(21) Cic., *Clu*., 117-134; Liv., *Per*., 98; Asc., *tog. cand*., 75; Plut., *Cic*., 17. 1; Cass. Dio, 37. 30. 4. cf., Broughton, *op. cit*., pp. 126-127. なおサッルスティウスも、前 50 年に元老院を除籍されている。

(22) 演説は Sall., *Cat*., 20. 2-17、58。陰謀の端緒となる前者は仲間に野心を打ち明けるという内容であり、引用した演説と構成上、対をなしている。書簡は Sall., *Cat*., 35 で、ローマを去る際に妻子の後事を、クィントゥス＝カトゥルスに託したもので、陰謀の転機を印象づける。

だということを想起させるため、諸君のために私は助言する。もし我々が勝てば、あらゆる物が我々に安全となるだろう。糧食は溢れんばかりとなり、自治市と植民市は (我々に) 開かれるだろう。もし恐怖によって退けば、事態は逆となるであろう。(自分の) 武器が守らなかった者を、どの場所も、どの友人も守らないだろう。戦士諸君よ、また我々に対するのと同じ苦境が彼らに切迫しているのではない。我々は、祖国のため、自由のため、人生のために戦う。彼らにとって、少数者の権力のために戦うのは余計なことである。それゆえ諸君の方が、先人の勇敢さを想起しつつ、より大胆に戦うのである。諸君には亡命地で極度の不面目と共に生涯を過ごせたし、(諸君の) 多くは財産が失われてもローマで他の者の助力を待ち望めただろう。そのようなことは勇士にとって忌まわしく耐え難いと思われたので、諸君はこちら側に従おうと決心したのである。もしこちら側を存続させたいならば、大胆さが必要となる。勝者以外は戦争を平和に変えられなかった (のだから)。むろん、(自分の) 身体を守る武器 (の狙い) を君が敵から外してしまうならば、逃走に安全を望むこと、これは実に愚鈍である。戦闘時は常に、最も恐れる者たちに最大の危険がある。大胆さは防壁とみなされる。戦士諸君よ、諸君を検分する時、また諸君の行為を評価する時、勝利の大きな期待が私を捕らえる。諸君の意気、年齢、勇敢さ、さらに臆病者さえも強くする苦境が、私を奮い立たせる。また敵の多勢が包囲できないように、場所の狭隘さが妨げてもいる。たとえ運命女神が諸君の勇敢さを妬んだとしても、(敵に一矢) 報いぬままに生命を失わないようにせよ。我々は捕まって家畜どものように虐殺されるのではなく、むしろ勇士たちの流儀で戦って血塗れの悲惨極まる勝利を敵に残そう。[23]

この演説がカティリーナによって実際に論ぜられたものであるかどうかは、あまり重要な問題ではない。なぜなら仮に現実に行われた演説であっても、それを採用した時点で、著者による編集という過程を経ているからである。著者自身の作文であれば、そこに彼の意図が反映されているのは自明である。いずれにせよ、この演説に含まれる極めて勇壮な価値観は、著者の理想を体現しており、明らかに悪漢と性格付けられた人物に語らせる内容ではないのである。ここまでの悲壮感はないものの、このような倫理的な調子は、カティリーナに仮託された他の演説や書簡にも現れている。ともすると、これらの言説を「いかなることをも偽り隠すことができ」[24]るカティリーナの虚偽にすぎないと解釈できるかもしれない。しかし、カティリーナ軍の最期を描く著者の筆致を見る限り、その解釈は適切なものではないといわざるを得ない。

さて戦闘が終結した後、その時カティリーナの軍隊に、どれ程の大胆さとどれ程の精神の力があったかを、(その場にいたならば、) 貴方は確かにみてとったことであろう。なぜなら、ほとんど全ての者が、生前戦って占拠していた場所を、生命を失っても身体で守っていたからである。また親衛隊が粉砕した中央部隊の少数者は、(他の者たちよりは) 僅かばかり離れていたが、全員が (身体の) 前面の傷痍によって戦死していた。しかしカティリー

(23) Sall., *Cat*., 58.
(24) Sall., *Cat*., 5. 4.

ナは、自軍から離れた敵の屍体の中で、まだ僅かばかり息があり、生前持っていた精神の果断さを表情に留めているのが見出された。結局、(カティリーナの) 全軍からは、戦闘中も逃走中も、生まれついての市民は誰一人捕らえられることはなかった。このように全員が、自分の (生命) と敵の生命を同様に (軽く) 扱っていた。[25]

このようにカティリーナと彼の軍隊の最期は立派なものとされ、著者が描くカティリーナ像は、地の文でも明らかに悪漢としての性格を喪失している。[26] この結果、カティリーナらに対する描写は、前半部とは大きく食い違ったものになっている。これに関連して、同じ言葉が使われてはいても、その文脈で意味が異なっている事例を確認しておくことにする。

『陰謀』には、「大胆な」(audax) という形容詞、その派生語 (名詞 audacia、副詞の比較級 audacius) が 17 回用いられる。[27] この言葉には「勇敢さ」と「無謀さ」の両側面があるが、一般には否定的な意味で用いられる。最初の事例は、著者が自身の若い頃の世相を振り返って、「慎み深さや節制や勇敢さ (virtus) に代わって、大胆さ (audacia) や放埒や貪欲が横行していた」[28] と述べる箇所である。これは明らかに勇敢さに代わって現れた悪徳としての大胆さであり、その直後、カティリーナの「精神は大胆で狡猾で捕らえ所が無く」[29] と評される。他方、ローマ史を概観する中で、古人が「戦時は大胆で、平和が現出したときには公正で、自らをも国事をも律していた」[30] との肯定的な表現や、カティリーナが陰謀を打ち明けるべく集めた者たちに対する「大変な窮乏と非常な大胆さを宿した者たち」[31] といった中立的な表現も存在する。人物評価にだけではなく、勾留されていた共謀者たちを解放する計画に対しても用いられる。[32] 後半部では、先に引用した演説で勇壮な調子を醸し出すために 4 回も用いられ、[33] 著者自身も「カティリーナの軍隊に、どれ程の大胆さとどれ程の精神の力があったか」[34] と賞讃を惜しまないのである。前半部でカティリーナらに付与されていた audacia が、悪徳から美徳へと転じているのは明らか

(25) Sall., *Cat*., 61. 1-6.

(26) 自分が行うのは自由人の問題であるからと、カティリーナが奴隷を軍隊として組織しなかったとの叙述も、立派なローマ人に相応しいイメージと言えよう。cf., Sall., *Cat*., 56. 5.

(27) Sall., *Cat*., 3. 3; 5. 4; 9. 3; 17. 2; 18. 4; 23. 2; 25. 1; 32. 2; 50. 2; 51. 37; 52. 11; 52. 15; 58. 2; 58. 12; 58. 15; 58. 17; 61. 1.

(28) Sall., *Cat*., 3. 3. 交差配語法が用いられているので、audacia は virtus に対応している。

(29) Sall., *Cat*., 5. 4. 同様の用法としては、グナエウス＝カルプルニウス＝ピソに対する「甚だ大胆で、貧しく、党派心に溢れ、貧困と悪習によって国家擾乱に駆り立てられていた名門の若者」(Sall. *Cat*., 18. 4)、クリウスへの「大胆さ同様、無節操が宿っていた」(Sall., *Cat*., 23. 2)、「男のような大胆さの犯罪を行っていたセンプロニア」(Sall., *Cat*., 25. 1) などが挙げられる。

(30) Sall., *Cat*., 9. 3. カエサルの演説中の「我らの祖先たちは、かつて熟慮も大胆さも欠いていなかった」(Sall., *Cat*., 51. 37) も同種の事例である。

(31) Sall., *Cat*., 17. 2.「ケテグスやレントゥルスや、備わった大胆さを (カティリーナが) 知っていた他の者たち」(Sall., *Cat*., 32. 2) にも、単純な能力としての「大胆さ」が示されている。

(32) Sall., *Cat*., 50. 2. 小カトーの演説中では、「悪事を大胆に行うことが強壮と呼ばれ」(Sall., *Cat*., 52. 11)、「まるで実際、悪人や罪人は、首都にだけいて、全イタリアにはいないかのように、あるいは守るための勢力がより小さい所では、(カティリーナ派の) 大胆な行為がより優勢となることがないかのように」(Sall., *Cat*., 52. 15) と行為に対しても否定的に用いられる。

(33) Sall., *Cat*., 58. 2; 58. 12; 58. 15; 58. 17.

(34) Sall., *Cat*., 61. 1.

である。このように考えると前半部の audacia には含意が感じられる。解釈が難しい所ではあるが、公的な「事実」から逸脱したカティリーナ像こそ、著者が本当に描きたかったものではないだろうか。以下、この見解を補強するべく、『陰謀』執筆までの著者の経歴を確認して、カティリーナとの関係性を指摘することとしたい。

前 86 年にアミテルヌムでサビーニ人家系に生まれたサッルスティウスは[35]、裕福な地方有力家系の出身であったと推測される。彼が何年頃ローマに来たのかは分からないが、事件時の対応についてのキケロに対する不満を「後にクラッスス自身が公言するのを私は聞いた[36]」と述べているので、クラッススがパルティア遠征のために東方に赴く前 55 年以前に、ローマに来た蓋然性が極めて高い[37]。前 55 年頃クアエストル職に就任し[38]、前 52 年度護民官職に選出されると、暴力的手段も厭わぬ活発な政治活動を展開した[39]。前 50 年にケンソルにより不道徳の廉で元老院から除籍されるが[40]、その理由は護民官時の活動かもしれないとされる。前 49 年からの内乱では、カエサルの麾下で多くの軍事作戦に関与した。前 48 年に 2 回目のクアエストル職に就任し、元老院の議席を回復したとされる[41]。前 47 年よりアフリカでの戦争に従軍し[42]、プラエトルになった前 46 年に、カエサルによって新設されたアフリカ＝ノウァ属州のコンスル級総督に任命された[43]。その後、不法取得財産返還訴訟の被告となるが、カエサルの介入によって免罪された[44]。前 44 年 3 月 15 日にカエサルが暗殺されると、政界から引退して著述活動に入った。前 35 年にローマで死去し、子孫に多大な財産を残したことも知られている。

両者の経歴上の共通点は、最高公職コンスルを頂点とする公職階梯を上り詰める途中で、政治の道を閉ざされたということにある。両者ともプラエトル職就任後、アフリカ方面で属州総督を務め、不法取得財産返還訴訟の被告となった。カティリーナはコンスル職に固執して死に、それを諦めたサッルスティウスは生き長らえた。事件当時の両者に、直接的な関係があったかどうかは定かではないが、政治家を志していた 20 代前半の彼にとって、事件が印象深かったことは疑いの無いところである。不惑を過ぎて人生最大の転機に立った著者が、カティリーナに自らを投影させたとしても不思議はないであろう。ただ重要な点は、彼が公式的な「事実」を排することなく、優れた政治感覚で歴史著作を記したということである。

---

(35) Hieron., *Chron*., 173. 3; 186. 2. なお以下の記述に Budé 版などの他 Syme, *op. cit*. も利用した。

(36) Sall., *Cat*., 48. 9.

(37) サッルスティウスがローマ以外の場所でクラッススの話を聞いたとしても、間近でクラッススの話が聞ける、ローマの政治に近い境遇にあったということにはなる。

(38) Ps. Cic., *Sall*., 5. 15. 史料の信憑性は低いが、この時期の就任は確実視されている。

(39) Asc., *Mil*., 44.

(40) Cass. Dio, 40. 63. 4; Ps. Cic., *Sall*., 16.

(41) Ps. Cic., *Sall*., 6. 17; 8. 21.

(42) Caes., *B Afr*., 8. 3; 34. 3.

(43) Caes., *B Afr*., 97. 1; App., *B Civ*., 2. 100; Cass. Dio, 43. 9. 2; Ps. Cic., *Sall*., 19.

(44) Ps. Cic., *Sall*., 19; Cass. Dio, 43. 9. 2-3.

おわりに――「偽り隠す者」――

サッルスティウスは、カティリーナの精神は「いかなることをも偽り隠すことができるもの」[45]と述べているが、見事な歴史著作を執筆しながら、その真の執筆意図を隠し果せた彼自身にこそ、その言葉は相応しいように思われる。その手腕は『ユグルタ戦記』で遺憾なく発揮され、「共和政末期の没落」のイメージを確固たるものにした。ここに新たな公式的な「事実」が誕生し、アウグストゥスの黄金時代を輝かせるための「末期史観」が形成されたのである。

本稿における史料の略語は、原則としては *Oxford Classical Dictionary*, 3rd ed., Oxford University Press, 1996 に依拠し、一部記述のないものに関しては慣用に従った。

(45) Sall., *Cat*., 5. 4.